

コドモのコドモ

2008(平成20)年9月1日鑑賞<GAGA 試写室>

★★★★



監督=萩生田宏治/原作=さそうあきら『コドモのコドモ』(双葉社刊)/脚本=宮下和雅子、萩生田宏治/出演=甘利はるな/麻生久美子/宮崎美子/伊藤梨沙子/須藤瞳/大熊彩花/川村悠椰/山田清貴/竹森雄之介/帯金遼太/草村礼子/塩見三省/谷村美月/森郁月(ビターズ・エンド配給/2008年日本映画/122分)

…… 11歳の小5の女の子が“くっつけっこ”で妊娠！ そりゃ本来大スキャンダルだが、それをアッと驚く顛末で明るくカラリと描いたのがこの映画のミソ！ 今ドキの子供は、小5でもしっかりしてるやん！ 思わず、そう唸ったが、こんな物語はあくまで映画だけの世界にしておかなければ……。

16歳の女子高生 vs. 11歳小5の女の子

2007年の第80回アカデミー賞で『JUNO / ジュノ』(07年)が作品賞、監督賞、主演女優賞、脚本賞の主要4部門にノミネートされた(現実に脚本賞を受賞)のはまさに奇跡だったが、この映画のヒロイン、ジュノは16歳の女子高生。この映画が面白かったのは、同級生の男の子とのたった1度の興味本位のセックスで妊娠したジュノが、望まない妊娠=妊娠中絶という通常の道を選ばず、自分の意思で出産を決意し、出産を実現するところ。ところが、さそうあきらが『漫画アクション』復刊に向けて編集部から受けた、「小学生にコドモを産ませてくれませんか」という注文に応じて原作を書いたこの映画『コドモのコドモ』は、『JUNO / ジュノ』の16歳の女子高生をさらに大きく下回る、何と11歳の小学5年生の女の子の妊娠、出産がテーマ。そのお相手は、同級生で幼なじみの鶴巻ヒロユキ(川村悠椰)だ。

近時は性教育が進み、子供たちは早熟、とはいっても小5の男女が意識して性行為をするなんてことがあり……？ たしかに、ごく一部の早熟で体格のいい小学校高学年の女の子をみていると、それもありがたなと思うものの、その場合そのお相手の多くは中学生か高校生の年上の男……？ 持田春葉(甘利はるな)とヒロユキという同級生同士の男女で妊娠したのは、性行為ではなく“くっつけっこ”によるものだったが、

さてその“くっつけっこ”から生じた思わぬ結果の中、春菜はいかなる決断を……？

キーウーマンは八木先生

『夕風の街 桜の国』(07年)や『たみおのしあわせ』(08年)、『アキレスと亀』(08年)、『純喫茶磯辺』(08年)等でいつも印象的な役を演じている麻生久美子が、この映画では一種の悪役(?)となるキーウーマンの八木先生役を。この映画にはいわゆるモンスター・ペアレントは登場しないが、春菜たちの担任教師がベテラン教師ではなく若い八木先生であることに不満をぶつける保護者への対応に、高松教頭(塩見三省)は大変。しかし八木先生が「積極的な性教育を」と言いだしたのを見れば、高松教頭もきっと後悔したのでは……？ 器官名を具体的に教え、人形でリアルに性行為を示すという性教育がホントに小5で必要なの？ 私はそう思うし多くの保護者や先生たちも同意見だが、八木先生は自分の信念に従って一直線。さて、それはどんな波紋を招くのだろうか……？ 映画後半に展開される学級崩壊＝クラスの反乱ともいべき状況をみると八木先生が少しかわいそうだが、春菜とヒロユキの「くっつけっこ」が生んだ思わぬ結果に、八木先生の教育方針が大きな影響を及ぼしたことは明らか……。

もう1人のキーウーマンは？

この映画のもう1人のキーウーマンは、クラスのまとめ役として指名・期待されている優等生の吉田美香(伊藤梨沙子)。春菜は、ヒロユキがブタマンこと久保田万作(山田清貴)にいじめられていると猛然と反撃するという元気で負けん気の強い性格だが、トラブルの発生を抑えたい美香からは春菜のそういう行為をいつも非難されるから、いつもむくれ気味……？ 春菜は丸山珠(須藤瞳)、朝倉真由(大熊彩花)と「仲良し3人組」を組んでいつも一緒だが、自分の体調の変化に気づく頃になると、珠や真由では頼りにならず、やはりまとめ役の美香が頼り……？

そんな美香は八木先生からも頼られっぱなしで、クラスの中に問題が起こるとそれを処理するのはすべて美香の責任に。優等生の美香は、ある日春菜の妊娠問題を相談に行ったのだが、それを全然聞こうとしない八木先生の反応にキレてしまったようだ。その結果、ある日クラスの中で反乱が……。八木先生は美香の責任でそれを治めなさいと指示(命令?)したが、美香はそれを敢然と拒否。ここに、クラス全員と八木先生との間にハッキリとした冷戦構造が生まれることに……。

🎬 「産む決断」への伏線は？

私が弁護士登録をした1974年頃、女子高生の事件を処理する中でリアルに教えてもらったのは、女子高のクラスでは必ず1人か2人に妊娠騒動が起こり、中絶費用のカンパ運動に発展するらしい。なぜみんなが乏しいおこづかいの中からカンパするのかというと、それは誰もが「明日は我が身」と思っているから……？

高校生である春菜の姉秋美（谷村美月）が、友人の朋子（森郁月）の妊娠中絶費用に充てるため、家のタンスの中にしまっている家計の財布から数万円をくすねて秘かに朋子に手渡している姿をみると、そんな話がよく理解できる。2人の娘をもつ母親（宮崎美子）のそこらあたりを見抜くカンの鋭さには感心しきりだが、妹としても、お姉ちゃんがそんな行動をとっていれば妊娠や妊娠中絶についてそれなりの知識をもつようになるのは当たり前。したがって、こんな間接的な体験は春菜が妊娠中絶をせず、赤ちゃんを産もうと決意した1つの伏線……？

🎬 地方都市なればこそ……

この映画の舞台は東北地方のとある地方都市。春から始まった春菜たちの物語は、夏、秋を過ぎて冬を迎えた時ある大きな結末を迎えるが、さすが東北地方の冬は雪がいっぱいで寒そう。この映画のロケ地となった秋田県の能代市では、テーマがテーマだけに、この映画のロケを受け入れることについて反対意見や反対運動もあったらしい。春菜の家は父親（斉藤暁）、母親の他、祖父（榎木兵衛）、祖母（草村礼子）、姉の秋美らが同居している大家族。そんな大家族なればこそ映画後半に展開されていく物語が可能となるわけだから、この映画の舞台は地方都市でなければ成り立たない……？ そんな大家族ならではの姉秋美との接点、父母が見せる愛情、さらに都会ではどうの昔に失われてしまった孫とおじいちゃん、おばあちゃんとの触れ合いをじっくりと観察したい。なぜなら、春菜の決断は、こんな大家族の中でこそ生まれたものなのだから。他方、私が不思議なのは、春菜の食欲が急にモリモリ増強し始めたり、家の中でゴロゴロ寝そべる回数が増えたり、私の目にも春菜のお腹がモッコリし始めたと思えるにもかかわらず、娘の行動にあれほど敏感な母親が春菜の妊娠に気づかないこと。もちろん、これは映画のドラマ性を盛り上げるための1つのテクニックだから、現実にはもっと早く誰かが気づき、しかるべき家族会議が開催されるのだろうが。

学級崩壊の一端も……

妊娠中はお腹がすき食べ物の好みも変わり、ガバガバ食べるもの。そう相場は決まっているが、授業中に先生の話のロクに聞きもせず堂々とサンドイッチを食べるという行動は、いくら小学生でも言語道断！ 私はそう思うから、そんな行動をとった春菜に対して八木先生が、食べ物を「渡しなさい！」と強く迫ったのは当然だと考えている。ところが、それに対する春菜の対応は？ そして、クラス全員の対応は？ さらに、八木先生から「ちゃんと事態を収めなさい！」と命令された、まとめ役の美香がとった行動は？ 私にはその後発生したクラス全員の集団エスケープという行動（＝反乱）は、いくら八木先生の授業のやり方が気に入らないとはいえ、絶対に容認することができないもの。最終的に全校の保護者たちに明らかになった春菜の妊娠、出産騒動を受けて、八木先生の責任問題が噴出するのは当然だが、こんな映画の中で、「荒れた教室」や「学級崩壊」の現実を見せつけられることになるうとは。

後半、興味深い物語が次々と……

最近の事務職希望の女性たちや法学部卒の若者、法科大学院卒の若者たちを見ていて痛感するのは、「指示待ち族」が多いこと。これは、指示されればそれなりに真面目に動くが、指示がなければ何も動けない人種のこと。つまり、自分で状況を分析しどう動くべきかを自分で考えていないから、誰かの指示がなければどう動いていいか全くわからないわけだ。しかも始末が悪いのは、これまで20数年間そういう生き方しかしたことがないし、見たことがないから、その修正はとてつもなく難しいこと。

ところが、美香を中心とする小学校5年生の諸君たちは、それと全く逆。つまり、赤ちゃんを産むと決断した春菜の気持をクラス全員で尊重し、ギリギリまでその秘密を守ったばかりか、予定日の1カ月前に突然始まった「破水」症状に対しても、美香と産婦人科医の息子である男の子の知恵によって何とか……。現実にこんな事態が起きては大変だが、映画としてはすごく面白い。しかし、その顛末をここで紹介するわけにはいかないので、そのハラハラドキドキぶりは自分自身の目で……。

法科大学院の教材にも最適？

民法731条は「男は、18歳に、女は、16歳にならなければ、婚姻をすることができ

ない」と定めているから、ヒロユキと春菜が結婚を合意しても、その年齢に達するまで2人は結婚することができない。また、民法737条1項は「未成年の子が結婚するには、父母の同意を得なければならない」と定めているから、20歳になるまでの間は、ヒロユキ、春菜それぞれの両親の同意が必要。

ここまでは法学部の学生なら当然わかるはずだが、もしヒロユキと春菜の間に無事に子供が生まれたら、その子どもの戸籍上の取り扱いはどうなる？ つまり、誰の戸籍にどのように記載されるの？ さらに、年齢的に2人がまだ婚姻できなくなれば、生まれてきた子供の父親が誰かということについての戸籍上の扱いは？ このように実務的には結構ややこしい問題が生じるわけだが、法科大学院で勉強中の院生は、これらの質問にすべて正しく答えることができる……？ そういう観点から観れば、この映画は法科大学院の民法（親族法）の教材としても最適……？

美香のリーダーシップを、次期総理総裁に！

この映画の前半は、ヒーロー役に設定された八木先生に対する、美香をリーダーとしたクラス全員の「子供たちの反乱劇」を楽しく鑑賞することができる。また、「早く大人に相談しなければ……」から、「絶対に大人たちには内緒」と、考え方が180度転換してからの美香のリーダーシップぶりはお見事の一言。そのリーダーシップは、学芸会の出し物や配役の決定から演技指導においてもいかに発揮されたが、予定日まであと1カ月という時点になると、ますます美香の役割は重要に。9月2日の今日、アメリカでは共和党大会を控えて南部のルイジアナ州、テキサス州などを襲う巨大ハリケーンへの対応が大問題となっている。そこでジョン・マケイン共和党大統領候補は危機管理能力の高さを全アメリカ国民に示すべく党大会を縮小してハリケーン対策に振り向けるほどその対応に懸念になっている。すると、美香が今果たさなければならぬ役割は、これと同じ……？ また、美香がそんな重圧の中で見事にその責任を果たしていく姿を観て、「何と情けない！」と思ったのが、昨日9月1日夜に観た福田康夫総理の突然の退陣発表。2年の間に2度も続けて総理大臣が政権を投げ出すとは、一体どういうこと！

自民党の次期総理総裁候補は是非、この映画で美香がみせるリーダーシップを学んでほしいものだ。

2008(平成20)年9月2日記